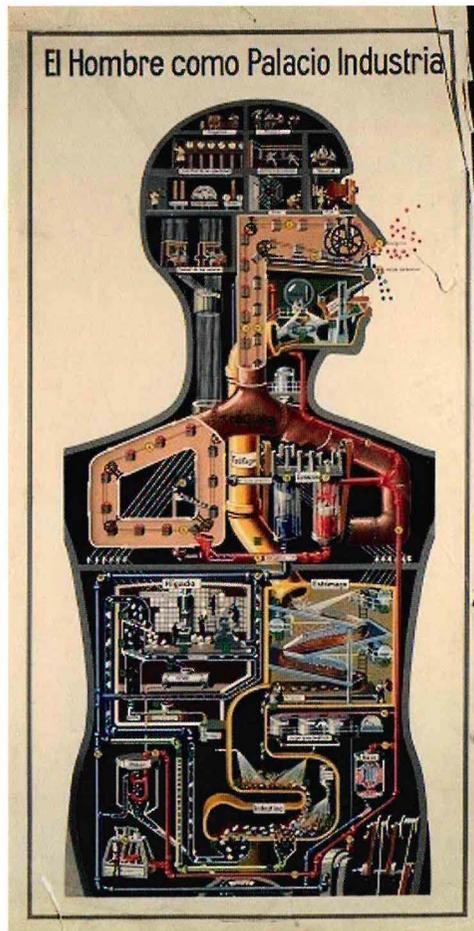


日本醫史學雜誌

第 56 卷 第 3 号

平成 22 年 9 月 20 日發行



通 卷 第1539号

日 本 医 史 学 会

その上の部分のアイヌ10人は森田氏所蔵の「蝦夷種痘図」では省略されている。芹澤美術工芸館所蔵の「種痘施行図」でも同様に省略されている。富士川の示した図で讃の末尾の署名は「塩田泰拝誌」であるが、「蝦夷種痘図」では「塩田拝誌」である。また富士川の示した図の落款「平澤氏印」(白文方印)と「屏山」(朱文方印)は「ウイマム図絵馬」, 「蝦夷風俗十二月月屏風」(文献6, p.29)に押されている落款とは異なっているように思われる。これは将来の研究課題であろう。本稿では屏山がアイヌ種痘図に描いたような光景を実際に見たか否かを問題にしているので、富士川の示した図が村垣家伝来の図であるか否かについてはこれ以上論及しない。

29) ぬぞうぬほうそうの図 高倉新一郎編. アイヌ絵集成〈図録巻〉. 東京: 番町書房; 1973. 第148図

- 30) 文献1 p.827
 31) 二宮陸雄. 桑田立斎先生. 東京: 桑田立斎先生顕彰会; 1998. p.258
 32) 文献31 p.261
 33) 文献1 p.427-428
 34) 文献1 p.447
 35) 文献1 p.464
 36) 文献1 p.574
 37) 文献1 p.927-928
 38) 文献1 p.589-648
 39) 文献31 p.278-279
 40) 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編. アイヌの美——カムイと創造する世界——. 札幌: 社団法人北海道アイヌ協会; 2009. p.139下段

A Consideration of the Picture “Vaccination of Ainos” Painted by Byozan Hirasawa, in the Possession of the Omsk Museum of Fine Arts

Akitomo MATSUKI, MD

Hirosaki University Graduate School of Medicine, Department of Anesthesiology

In 1857, Norimasa Muragaki (1813-1880), a magistrate of Hakodate, proposed to the Tokugawa shogunate the compulsory vaccination of the Ainos. The shogunate accepted this and dispatched Ryusai Kuwata (1811-1868) and his colleagues to the Ezo area. They practiced the compulsory vaccination of the Ainos, with huge difficulty, from 1857 to 1858.

A merchant Kashichi Sugiura of Hakodate presented to Muragaki a picture of the scene of Kuwata's vaccination practice to praise his excellent decision on vaccination, made in October, 1857. This was painted by Byozan Hirasawa (1822-1876).

Another picture of vaccination, painted by Hirasawa, has been found in the possession of the Omsk Museum of Fine Arts. The detailed composition of this picture is somewhat different from those of known copies. This suggests us that there might have been several sketches of the scene of vaccination. However, Hirasawa is believed not to have witnessed the actual scene as depicted in the picture, because Kuwata and other physicians did not practice in front of Muragaki during Kuwata's stay in Hakodate, as Muragaki did not describe anything about the vaccination practice in his formal diary.

Key words: Norimasa Muragaki, Ryusai Kuwata, Kashichi Sugiura, Byozan Hirasawa, Painting of Vaccination to Ainos

日本医史学会平成22年3月特別例会 「大塚恭男先生をしのぶ会」

1. 戦後の日本漢方医学界の展望 ——日本東洋医学会及び東亜医学協会を中心として——

原 桃介

日本東洋医学会名誉会員・東亜医学協会監事

1. 戦前・戦中の漢方医学界

明治政府による国策により、法律により西洋医学の試験に合格したものでなければ医師となることができないとされ、漢方医学は医学教育機関で教えなくなり、衰微したが、明治、大正、昭和を通じて、漢方を信じるわずかの漢方医家や民間の薬剤師、薬種商たちにより漢方は維持されてきた。

1934年、上記の人達により東京に日本漢方医学会が成立し、機関誌「漢方と漢薬」を発行、全国的統合が行われた。1935年、漢方医学の復興を志していた大塚敬節、矢数道明、矢数有道、石原保秀、柳谷素霊、木村長久、清水藤太郎らが協力して、「偕行学苑」を設立した。そして、いわゆる漢方の古方派、後世派、折衷派の三派合同に鍼灸、薬学、医史を含めた漢方講習会を開催した。1938年、「偕行学苑」を国際的見地より、東アジア諸国の伝統医学を通じて、相互の文化提携、親善友好を図って新たに東亜医学協会を結成した。そして機関誌「東亜医学」を発刊して、日中伝統医学の交流に先鞭をつけた。

1943年、同愛記念病院に半官半民の東亜治療研究所が設置された。所長は板倉武が就任し、職員は大塚敬節、岡部素道らで、漢方、鍼灸、手技、薬理などを含めた新しい治療学の研究を進めようとしたが、1945年3月の大空襲により中絶した。そして8月、日本は無条件降伏をした。

2. 日本生薬学会、日本東洋医学会、東亜医学協会、和漢薬学会などの設立

戦後いち早く、1947年に日本生薬学会が設立された(現会員1,600名)。1948年4月には東亜医学協会主催で戦時中に物故された漢方医家の合同慰霊祭が行われた。

戦後間もない1947年5月、千葉医科大学において東洋医学研究会自由講座が公認課外講座として開講した。この講座は伊東弥恵治教授が責任管理し、その門下生及び東洋医学研究室の関係者(鈴木宣民、藤平健、長浜善夫他)、や東洋医学研究会(学生)などの支持によって推進されていた。

この千葉医大自由講座の学外講師をしていた龍野一雄の奔走により、1949年、学会設立準備委員会が発足した。委員は、細野史郎、大塚敬節、和田正系、龍野一雄、長浜善夫、矢数道明、山崎順、丸山昌郎、間中喜雄、藤平健、森田之皓(幸門)であった。

1950年3月、日本東洋医学会創立総会が板倉武を議長に選出して行われた。会員数98名であった。(現在の会員は8,500名、日本東洋医学雑誌を発行している)。

1954年8月、矢数道明の提案により、東亜医学協会を復活、再発足して矢数が理事長に就任し、新構想による月刊漢方誌「漢方の臨床」を発刊した。この雑誌は爾来56年となり、日本東洋医学雑誌とならんで幅広く日本の漢方界を支えて来た雑誌となっている(会員1,350名)。

1967年9月、第1回和漢薬シンポジウムが、

富山大学薬学部和漢薬研究施設（施設長 木村康一）主催で開催された。和漢薬を現代医学的手法のもとに研究し、現代医学との連携しようとするもので、和漢薬の科学的研究にはずみがついた。1984年に和漢医薬学会に発展した。「和漢医薬学雑誌」を発行している（会員1,000名）。

その他に、漢方薬局を主とする団体に日本漢方交流会（1968年設立、800名）と日本漢方協会（1970年設立、1,000名）、中医学を主とする日本東洋医学会（1983年設立、500名）、日本小児東洋医学会（2001年設立、600名）などがある。また、小規模の漢方研究会などは全国に多数あり、「漢方研究機関・団体・研究会名鑑、東亜医学協会発行2000年」には160ほど登録されている。

3. 医療用漢方製剤の開発と保険薬価収載

1944年、東亜治療研究所において、板倉武、川上岩雄が漢方エキス製剤の開発に成功し、1945年には漢方エキス製剤「小柴胡湯」の比較臨床試験を行った。これがわが国における臨床試験及び漢方エキス製剤使用の嚆矢である。

1947年、渡邊武、後藤実は「漢方方剤の煎出法に関する研究」を日本薬学会で発表した。1950年、細野史郎、坂口弘は漢方エキス製剤20種類を作り、臨床研究の賛同者を求めたが、賛同を得られなかった。時期尚早だったと考えられた。

7年後の1957年8月、小太郎製薬、長倉製薬は漢方エキス製剤を製造発売した。そして1967年6月、漢方エキス製剤4処方（小太郎漢方製薬）が初めて保険薬価収載された。

1974年、中央薬事審議会漢方生薬製剤調査会（大塚敬節、浅野正義、西本和光、菊谷豊彦）が発足し、当時の日本製薬団体連合会の提出した素案をもとに、漢方製剤の効能・効果、用法、用量などを検討して210処方について答申した。これが一般用漢方210処方の内規である。

1976年9月、漢方製剤43処方（八味地黄丸と八味丸を同一処方とみなせば42処方）が薬価基準に収載され、漢方製剤は薬効分類上初めて漢方薬に分類された。菊谷豊彦は漢方製剤が医療用になるまでには、1. わが国における疾病構造が変化、

薬害の多発、2. 国際的に伝統薬の見直し、3. エキス製剤技術の開発、4. 漢方製剤の法的整備、など漢方製剤が社会に受け入れられる環境が整ったなかで、武見太郎医師会長の尽力と厚生省の決断により上記の採用がなされたと推測している。

4. 戦後の漢方医学書

戦後特に1955年以降、漢方医学書の発行が急増した。いかに戦後漢方の学習、研究が盛んとなってきた証拠である。その中でも、もっとも大きな影響を与えた著書は「漢方診療医典」大塚敬節・矢数道明・清水藤太郎著1969年である。今ひとつは、「近世漢方医学書集成」大塚敬節・矢数道明責任編集、名著主出版、1979年である。高価で入手困難であった漢方古医書がこの復刻の発刊で容易に手にとれる事ができるようになった。

5. 北里東医研の設立及び各地の東洋医学研究所の設立

1972年6月、戦後始めて基礎・臨床両面からの伝統医学の総合的研究所として、北里研究所附属東洋医学総合研究所が発足した。大塚敬節が初代の所長に就任した。本研究所はわが国における東洋医学の臨床、研究、教育の発展の牽引車として大きな役割を果たしてきた。その後、引き続き、各地に東洋医学研究所が設立された。（近畿大学東洋医学研究所、富山大学和漢医薬学総合研究所、東京女子医科大学東洋医学研究所、慶応大学医学部漢方医学センター、自治医科大学地域医療センター東洋医学部門）

6. WHO 伝統医学協力センター指定

北里研究所東洋医学研究所は、1986年3月、WHOより伝統医学研究協力センターとして指定された。こうして伝統医学の研究を広く国際的に言い、そして外国からの研究者に対して研修の機会を提供することとなった。

ついで1988年4月には、富山医科薬科大学和漢診療部もWHO伝統医学研究協力センターに指定された。

7. 専門医制度の確立

日本東洋医学会は1989年、専門医制度規約、経過措置を発表し、専門医制度が発足した。

1996年、学会は日本専門医認定機構に加盟し、試験制度を実施して、5年ごとに更新している。現在の専門医は2,300名である。

2008年には標榜診療科が実現した。

8. 日本医学会分科会加盟

1991年6月、日本東洋医学会は長年の希望であった、日本医学会分科会の加盟が承認された。これは学会創立からの希望で、4回目の申請でやっと宿願を達成した。長年の学会の努力と加盟準備委員会（委員長松田邦夫）の周到な準備のおかげである。

9. 漢方薬批判とEBM研究

高橋暁正はいち早く二重盲験法による科学的薬効判定の必要性を提唱し、医薬品、医療、厚生行政に絶え間なく批判を続けていたが、東洋医学に関しても、1969年、計量診断学・治療学の立場から「漢方の認識」を著した。この本は漢方・鍼灸とはどのようなものかを分析した上で、その有効性と安全性を科学的に検討しようとしたもので、漢方・鍼灸界に大きな衝撃を与えた。

こうした世界的な医療技術評価の動向をうけて、2001年日本東洋医学会はEBM委員会（委員長秋葉哲生）を設置した。そして「2002年中間報告 漢方におけるEBM」、「漢方治療におけるエビデンスレポート」2005年、を日本東洋医学雑誌別冊として発行した。また「EBM漢方」寺澤捷年・喜多敏明編著2003年、も出版された。2009年には日本東洋医学会で「漢方エビデンスレポート2009-320のRCT」（委員長津谷喜一郎）が学会Web上で公開され、多忙な臨床医に役立つ。

10. 小柴胡湯に対する緊急安全性情報

漢方薬は西洋薬と比較すると、その副作用はき

わめてすくないが、薬物である以上有害作用は起こるものである。肝疾患に対する治療薬として、小柴胡湯が大いに期待されて多数の患者に投与されてきた。しかし1996年、厚生省より「小柴胡湯による薬剤性間質性肺炎が135例発生し、19例が予後不良であった」という小柴胡湯に対する緊急安全性情報が出された。日本東洋医学会では、この問題についてシンポジウムを開催して啓蒙し、小柴胡湯の適応を厳密にするよう指導した。小柴胡湯の使用量は激減した。

11. 医学教育コア・カリキュラムに和漢薬を追加

2003年3月、医学生が履修すべき必要不可欠な医学教育コア・カリキュラムの一般目標「診療に必要な薬物の基本を学ぶ」に「和漢薬を概説できる」が、寺澤捷年教授の尽力で追加された。

12. 大学医学部に漢方講座の開設

医療用漢方製剤に保健医療が適用され、多数の医師が漢方薬を使用するようになると、多くの医学部で教育が開始された。もっとも早く漢方医学の講座を開設したのは富山医科薬科大学で、ついで東京女子医科大学がそれに続いた。その後多くの大学医学部で漢方医学関連の講座が開設されている。（大阪大学、京都府立医科大学、群馬大学、千葉大学、東海大学、東京大学、東北大学、富山大学、日本大学）そして漢方医学の講義はすべての医学部で行われるようになっていく。2008年の日本漢方生薬製剤協会の調査によると、医師の83.5%が漢方薬を使用している。

13. 国際東洋医学会など国際交流、日本東洋医学サミット

1961年以来、韓国の裴元植が毎年日本東洋医学会学術総会に参加し、日本と韓国の交流の橋渡しを行っていた。1980年、金沢の総会に中国より崔月犁氏らを招待して以来、中国との交流も盛んになり、1981年、日中友好「傷寒論シンポジウム」が北京で開催され、1982年、「張仲景学説学術討論会」が河南省南陽市で開催され、日本東

洋医学会学術交流訪中団が北京、南京などを訪問し東洋医学の交流の実をあげた。

国際東洋医学会はもともと大韓韓医師協会によって1976年に創設されたものであるが、1985年京都で開催された第4回国際東洋医学会（会頭坂口弘）において初めて国際学会の名にふさわしい大会となった。その後、第6回（会頭山田光胤、1990年）、第10回（会頭松田邦夫、1999年）、第15回（会頭中田敬吾、2010年）とわが国で開催され、歴代会長に坂口弘、山田光胤、室賀昭三、中田敬吾が名を連ねている。

伝統医学が世界的に見直され、WHOを中心とした国際交流が盛んになってきた時代となって、伝統医学に対する国の支援確立や伝統用語・情報の国際標準化などのために、2005年日本東洋医学会会長石野尚吾の提案で、日本東洋医学サミット会議（日本東洋医学会、全日本鍼灸学会、和漢医薬学会、日本生薬学会、北里大学東洋医学総合研究所WHO伝統医学強力センター、富山大学医学部WHO伝統医学協力センター）が発足した。

14. 先哲漢方医家の顕彰碑、追薦祭

日本東洋医学会、日本医史学会、東亜医学協会、各地の顕彰会では、戦後、先哲漢方医家の顕彰碑を建立し追薦祭を行ってきた。

参考文献

1. 矢数道明. 明治110, 117, 122年漢方医学の変遷と将来 漢方略史年表 東京: 春陽堂; 1979, 1986, 1991.
2. 矢数道明編・編集局増補 東亜医学協会70年の歩み 東亜医学協会; 2010.
3. 石野尚吾. 現代医療の中の漢方医学 専門医のための漢方医学テキスト 日本東洋医学会; 2009.
4. 安井廣迪. 医学生のための漢方医学 市川: 東洋学術出版社; 2008.
5. 日本東洋医学会①10年史, ②20年史, ③30年史, ④40年史, ⑤50年史, ⑥60年史.
①② 日本東洋医学会誌 1969; 19(4): 41-76
③ 日本東洋医学会; 1979
④ 日本東洋医学雑誌 1990; 40(5)
⑤ 日本東洋医学会; 2000
⑥ 日本東洋医学雑誌 2010; 61(4)
6. 国際東洋医学会30年史 国際東洋医学会; 2005.
7. 菊谷豊彦. 漢方製剤の医史的検討. 漢方の臨床 2006; 53(9): 1521-1523
8. 原 桃介. 高橋暁正が日本の医学会でなしたこと. 漢方の臨床 2005; 52(12): 2097-2103
9. 板倉武先生顕彰記念文集編集委員会 治療学の確立と東洋医学の再興をめざした板倉武 東京: 医聖社; 1989.

2. 大塚恭男先生の人と仕事

小曾戸 洋

北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部部長

はじめに

平成21年(2009)3月8日朝、大塚恭男先生は御逝去された。満79歳であった。当日の日曜日は日本東洋医学会の関東甲信越部会が平河町で開催中で、奥様より御連絡を受けて昼に大塚邸に馳せ参じた親族以外の関係者は、石野尚吾・丁宗鐵・花輪壽彦先生と私の4人だった。すでに病院より戻られていた御遺体に手を合わせ、奥様と渡辺賢治先生より御逝去の経緯を伺った。

通夜は11日午後6時~7時、告別式は12日午前11時~12時、四谷たちばな会館において多数の参列者のもと肅々と行われた。12日午後の代々幡斎場における火葬、遺骨納壺から同日(初七日)の会食は御遺族のみで行われたが、私は大塚家の奉公人に準じてか、遺族外で唯一人列席させていただいたことは、弟子としてこのうえない幸であった。奥様の思召しは、いつ想い出しても目頭が熱くなる。

公的には「大塚恭男先生顕彰会」が2ヶ月後の平成21年5月9日、品川のホテルパシフィック東京にて午後5時より開催された。発起人代表は、寺澤捷年東亜医学協会理事長・酒井シヅ日本医史学会理事長・花輪壽彦北里大学東洋医学総合研究所所長・石野尚吾日本東洋医学会会長。発起人は66名。約100名の参加者があった¹⁾。このとき岡田靖雄先生から、一周忌の追悼会は日本医史学会の主催で行いたい、という御提案があった。

大塚家親族の一周忌は平成22年3月6日(土)、新宿・ハイアット・リージェンシー東京の翡翠宮において行われ、親族以外の門人数名も参加し、恭男先生の生前を偲んだ。

そして3月27日(土)、昨年来の岡田先生の提

唱を受けて、恒例の日本医史学会例会を「大塚恭男先生をしのぶ会」とし、順天堂大学10号館2階において開催したのである²⁾。当日は大塚恭男先生の泰子夫人ほか御親族も参加。泰子夫人からはご挨拶をいただくとともに、日本医史学会に多額の御寄付を賜った。ここに記して謝意を表する。終了後は酒井シヅ先生の計らいで順天堂の山の上ホテルレストランにおいて御遺族を交えた関係者による懇親会がもたれた。

本稿は当日の「しのぶ会」における筆者の講演内容を整理し、加筆して纏めたものである。

1. 私と大塚恭男先生

私が大塚恭男先生に初めてお目にかかったのは昭和53年のことであった。当時先生は(社)北里研究所附属東洋医学総合研究所の臨床研究部部長の職位にあり、私は厚生省の高官・本山氏の紹介状をもって、東医研の臨床研究部長室をお訪ねした。私は当時、近畿大学東洋医学研究所(有地教授・久保助教授)に勤務しており、東京での再就職を希望していたので、岳父の薦めで、岳父と恭男先生の共通の友人であった本山氏を介して北里東医研を目指したのである。私は昭和50年に、恭男先生の御尊父・敬節先生をお宅に二度にわたりお訪ねしたことがあり、敬節先生とは面識も文通もあった。

当日、私は恭男先生に、中国医学古典や伝統薬学の歴史を研究したいと希望を述べた。先生は、自分ももとよりその分野には興味があると言われ、御自分で書かれた「甘草の歴史」という論文の別刷を下された。しかし、私の就職に関しては、東医研はいまだそこまでの余裕はない、研究者として身を立てるには学位を取得するのが先決

だろうとの助言を述べられた。私は帰路「甘草の歴史」を読んで恭男先生の学問の深さを痛感した。

私が念願の北里東医研の就職を果たしたのはこの4年後、昭和57年4月のことである。その間、昭和55年10月に東医研初代所長の塚敬節先生が亡くなられ、矢数道明先生が2代所長に就任された。私はすでに昭和50年から矢数道明先生の門人であった。敬節先生も道明先生も恭男先生もみな医学史には造詣が深かった。新所長に就任された道明先生は、医学史の研究部門を作ることを企てられ、恭男先生と協議を重ね、実行に移されたのである。

私は恭男先生の助言に従い、昭和54年に近大東医研を辞し、昭和56年には鹿児島大学医学部生理学教室から日本大学医学部生化学教室に籍を移して医学博士取得の研究に入っていた。また同じ昭和56年10月には、中国医学古典の基本典籍たる『黄帝内経太素』『諸病源候論』『脈経』『外台秘要方』などを収録した『東洋医学善本叢書』を編刊して世に問うたところであった。道明先生は私の業績を高く評価して下さり、恭男先生もまた当時日本医史学会で発表していた私の研究を認めて下さり、昭和57年4月、晴れて私を北里東医研の医史学研究者として迎えて下さったのである。

恭男先生は私が北里東医研に入所するとき、身元保証人を買って出て下さった。書類の本人との関係欄に「友人」と記入されたので、「上司と書いて下さい」と申し上げたら、「君とは友人だ」とおっしゃった。感激に耐えなかった。先生はそういうお人柄であった。こうして生涯の恩人、恩師となり、畏敬かつ親愛する人となった。

私は酒は強いほうではないが、嫌いというわけではないので、よく先生のお伴をさせていただいた。ことに医史学関係の先生には酒を好まれる先輩が多かった。他界された宗田一先生、三輪卓爾先生、矢部一郎先生などしかりである。

銀座にはシルクロードという小さな店があった。本郷の東大赤門前の小道を入った右手には鳥八という焼鳥屋があり、先生は学生時代から通っていたという。最後にお伴したときは、もと若く綺

麗だったというおかみさんには孫がいた。昨年一人で訪ねたら店は跡形もなく更地になっていた。

順天堂での医史学会会合の帰りはお茶の水駅聖橋出口近くの2階の飲食へ皆でよく行った。今は沖縄料理の店になっている。

先生の最後の仕上げはたいい四谷三丁目荒木町のイニシャルYという店だった。ママの名はY.F. 今もある。あるいは近くの伽羅という小料理屋にもよく行った。

北里研究所では昼間、診療のないとき、しばしば麻布十番まで歩き、赤い靴のきみちゃん像に小銭を奉げた。「赤い靴」の歌も唄った。帰りは有栖川公園に立寄るのが決まりだった。よく歩いたものである。先生は私よりも健脚だった。診療中の昼食はやむなく店屋物のざるそばで済まされることが多かったが、外食では近くの大久保だんごという店がご最良だった。先生は甘辛両党。副所長室(のち所長室)で飲むときは、肴は煎餅があれば上等。下手をすれば大糞か、あるいはエビオス、ビオフェルミンを齧りつつ学問談義が続くのであった。

そういうことが何より楽しい毎日だった。この手のエピソード、もっと書きたいことが山とあるが、これ以上は自制すべきだろう。ただ、先生はどんなに飲まれても品位だけはいささかも落とされることはなかった。

私が最後に恭男先生の尊顔を拝したのは平成19年2月28日であった。北里研究所の意向を受けて、先生のご自宅にドイツ・マールブルグ大学の銅版画³⁾の返却を求めて伺ったのである。先生はもはやこの品に何の未練も示されなかったが、私は失礼を心の底から詫びた。これがこの世での最後となったことは今もって悔いても悔い切れない。

初対面から最後の拜眉まで29年間。ことに、私の入所昭和57年から、恭男先生が北里東医研の外来診療を平成13年3月に終了されるまでの19年間、親兄弟よりはるかに密接な御交誼を得、御奉公できたことは、私の人生で最大の幸福であった。



昭和59年4月21日、名古屋における第85回日本医史学会にて
(後列、向かって左から真柳誠・花輪壽彦・石原武・大塚恭男・矢数道明・平馬直樹・安達原暉子、前列、丸山敏秋・小曾戸洋・安井広迪)



平成6年4月27日、青梅の玉堂美術館前にて
(左は慶応義塾大学医学図書館の窪田よし女史。小曾戸が大塚先生と旅行したのはこれが最後となった)

2. 大塚家略史⁴⁾

大塚恭男先生は医系の5代で、初代は希斎という。代々、堂号を修琴堂と称した。希斎は土佐高知の人で、山内侯の家臣。産婦人科を業とした。その先祖は北村姓で、山内一豊に従って高知に移ったと伝えられる。「修琴」とは人体を琴になぞらえ、健康体を作ることから。希斎にはなかなか子供がでできなかったので、兄の子を養子とした。2代目恭斎である。

恭斎も産婦人科を継いだ。恭斎はかの華岡青洲が開いた家塾「春林軒」に入って医を学んだ。華岡塾の門人帳に「安政四年三月十五日土佐領石邑大塚恭斎」とあるのがその人である。恭男先生の名はこの2代目恭斎に因む。

恭斎が養子に入ってもなく、希斎には男子ができた。仰軒という。仰軒は明治の初期に東京大学医学部に入ったが、石炭王に憧れて中退した。仰軒はドイツ語が話せたことから、地質調査でたまたま高知を訪れたナウマンと親交を結んだ。「ナウマン象」で有名なお雇い外人、ドイツのエドモンド・ナウマンである。再度高知の土を踏んだナウマンは大塚家に招かれ、興のむくまま毛筆を執り、漢文で「学は見聞を専らにし、命は経験を増す」と揮毫した。その扁額は現在も大塚家に伝わる。修琴堂3代目は恵迪といい、済生学舎に学び

西洋医学を納めた。

大塚修琴堂の名を日本中に知らしめたのは、4代目の敬節である。明治33年の生まれ。大正12年に熊本医学専門学校を卒業した。

敬節は医専で西洋医学を学ぶうちに、西洋医学に対し、疑問を抱くようになった。それは、内科の教授の治療ではいっこうに好転しなかった不眠症と盗汗^{おあせ}の持病が、民間健康法で一晩にして治癒したのがきっかけだった。

医専を卒業した敬節は、漢方医学を学ぶ決意を固め、当時の数少ない漢方医書をむさぼり読んだ。最も感銘を受けたのが、当時刊行されたばかりの湯本求真著『皇漢医学』である。

『皇漢医学』の独習によって試みた漢方薬は、驚くほどの効果があった。手さぐりで用いてもこれほどだ。師に就いて学べばどんなに効くことか。こう思ったら矢も盾もたまらない。敬節は妻と生後まもない長男恭男先生を高知に残し、単身東京へ出て、湯本求真の門に入った。周囲の人はみな反対した。時に昭和5年、31歳であった。

翌昭和6年、敬節は郷里から妻子を連れ、東京・牛込船河原町に開業した。当時漢方といえば零落のどん底だった。患者の一人も来ない毎日が続いた。しかし向学心はつもの一方だった。

そのころ、敬節は詩友の伊福部隆彦を介して、権藤成卿の知遇を得た。権藤は農本主義者で、そ

の主張するところは自然漸化の東洋思想に根ざしたものであった。敬節は大いに感じ、その思想を漢方に生かすべくつとめた。

敬節は湯本求真に就いて、『傷寒論』を信奉する古方派の漢方を修めた。当時の漢方界では後世派や折衷派をもって任ずる別派もあった。これに対し、権藤は「古方派には排他癖がある。反対学を学べ」と説いた。権藤の助言は敬節の考えを一転させた。「ただでさえ少ない漢方家同士が角つき合わせていたのでは、自分で自分の首を絞めるようなもの。大同団結だ」。こうして敬節は、日本漢方界の団結と復興への道を邁進することとなる。

敬節は昭和55年に80歳の生涯を閉じるまで、そのすべてを漢方に捧げた。昭和9年、日本漢方医学会の創立。昭和11年、偕行学苑の結成。東亜医学協会の発足。昭和18年、同愛記念病院東方治療研究所設立。戦後昭和25年、日本東洋医学会発足。さらに金匱会中将湯ビル診療所、日本漢方医学研究所の創設。これら戦前戦後の漢方の研究・教育・診療機関の設立に、つねに主導者として活躍。昭和漢方の第一人者としての名声を不朽のものとしたのである。大塚修琴堂は西荻窪を経て、昭和30年四谷三栄町に移転。常に門前市をなすほどの患者の評判を得た。

昭和48年には、武見太郎日本医師会会長と計り、港区白金の北里研究所敷地内に、北里研究所附属東洋医学総合研究所を創設し、初代所長に就任した。同研究所は日本で最初の公認東洋医学総合研究機関で、ようやく漢方は現代医療のなかでの地位を確保した。昭和53年には漢方界で初の日本医師会最高優功賞の受賞者となった。

3. 大塚恭男先生略歴

大塚恭男先生は昭和5年1月29日、大塚敬節の長男として高知県香美郡日章村田村に生を受けた。母堂は福栄。翌昭和六年に上京して牛込区船河原町に居住した（敬節は前年に上京。その間の経緯は大塚恭男「東洋医学とわたし」⁹⁾を参照）。

東京府立津久戸国民学校、東京府立第一中学校、旧制武蔵高等学校、旧制第一高等学校（新制

東京大学教養部・武蔵大学）を経て、昭和26年、東京大学医学部医学科に入学。昭和30年、同大学卒業。翌年、東京大学附属病院第一内科勤務（日立製作所病院に派遣）。昭和33年、東京大学大学院医学博士課程（薬理学）に入学して昭和37年に同過程終了。医学博士。この間、昭和35年に泰子夫人と御結婚。二女を儲けられた。昭和37年～41年、旧西ドイツ・オーストリアに留学（カール・トーマ社薬理研究所、ウィーン大学医学部薬理学教室）。帰国後、東京大学薬理学教室勤務、また横浜市立大学（薬理学）講師を経て、昭和47年に（社）北里研究所東洋医学総合研究所に入所（非常勤）。昭和51年から常勤となり、北里研究所部長。その後、東医研臨床研究部部長、北里研究所社員、北里大学客員教授、東医研基礎研究部長などを歴任し、昭和57年に東医研副所長に就任。昭和59年には北里研究所理事。昭和61年には東医研所長に就任した。平成5年には北里研究所の副所長となる。

学会関係ではとくに（社）日本東洋医学会と日本医史学会の運営に尽力され、両学会の理事、常任理事などを長年勤められた。昭和57年および平成元年には日本東洋医学会副会長、そして昭和62年には同学会会長に就任された。また同昭和62年には日本医史学会総会会長も任じられた。

平成8年、北里東医研所長、北里研究所副所長を辞して、北里東医研名誉所長となられ、修琴堂



平成元年秋、閉鎖中の修琴堂大塚医院診療室の前にて（修琴堂の扁額は書家・川村驥山の揮毫）

大塚医院を再開業。以後、東医研の外来診療は週一回担当されたが、これも平成13年3月をもって終了された。

恭男先生は文学者でもあり、幼いころから和歌や漢詩に親しみ、広く和漢洋の古典に通じた。百人一首の選手もやった。アララギ派にはとりわけ傾倒した。話題が斎藤茂吉や中村憲吉に及ぶと、とどまるところを知らなかった。その作品はことごとく読んで暗記したというから、恐れ入る。

医学部1年生のとき「朝日歌壇」に投稿した。年が明けた昭和27年3月30日の朝日新聞に、斎藤茂吉選として「燈を消して寒くなりたる午後五時の解剖室に手を洗ひをり」が載ったときの嬉しさは忘れないとよく語っておられた。同じ年には広島島の布野に中村憲吉の生家を訪ねた。数年後に迎えた泰子夫人との新婚旅行でも再度布野を訪れたという熱の入れようであった。

また漢文にもめっぽう強かった。若いころには古典漢文の典範『文選』を原書で通読したこともあったという。少しアルコールが入ると、六朝・唐宋の漢詩が無尽蔵に出る。一方、フランス文学も原書で読んだ。ドイツ語も英語も達者である。酒席の余興にはインド訛りの英語も出る。こういうわけだから、恭男先生の文章の巧さは斯界では定評がある。その随筆は人の心をとらえて離さない。

中学1年のとき、恭男先生は『学友』という雑誌に、父敬節の学友A先生（荒木性次）のことを題材にし、「僕もA先生や父の志を継いで医師となり、今日では衰亡のどん底にある東洋医学の復興の為に懸命の努力を捧げたいと思っています」と将来の抱負を書いた⁶⁾。そしてついにそれを生涯貫かれたのであった。

4. 主 著

編著、共著書はすこぶる多く、枚挙に遑がない。主著に次のような出版物がある。

『東洋医学入門』（日本評論社、1983、並製B6判、350頁）。53歳のときの出版。かつて諸種の雑誌、書籍に載せられた文章に若干の手を加えて編集したもの。「東洋の医学」「漢方の治療」「本草

ノート」「東洋医学の人びと」の各篇からなる。

『東西生薬考』（創元社、1993、上製A5判、310頁）。1969年から1977年にかけて（39～47歳）『活』という雑誌に「西洋の生薬治療」と題して連載した記事をまとめたもの（第1部は『ファルマシア』から）。東西の文献に通じた恭男先生ならではの名著。親友の有馬朗人先生（元東京大学学長・文部大臣）による名書評（読売新聞、1993.4.5）がある。

『漢方と薬のはなし』（思文閣出版、1994、並製B6判、276頁）。『日本工業新聞』（1984）、『毎日新聞』（1989）、『月刊クレーン』（1986～1989）その他に掲載された記事をまとめたもの。第1部は「私の漢方ことはじめ」「東洋医学のすすめ」「やさしい漢方」、第2部は「くすり徒然草」、第3部は「思い出の人びと」（武見太郎、中村憲吉、朝比奈泰彦、北里善次郎など）からなる。第2部では恭男先生の博学ぶりがうかがえる。

『医学史こぼれ話』（協和企画、臨床情報センター、1995、新書判、278頁）。『漢方医学』という月刊誌に1977年（47歳）から10年余り、270回にわたって連載したコラムを集めたもの。序文はかの森岡泰彦先生（東大医学部の同級生）が執筆。西洋編・東洋編・日本編の3部からなり、古今東西の医学史トピックスが軽妙なタッチで紹介されている。

『東洋医学』（岩波新書、1996、新書判、225頁）。恭男先生はずいぶん前からこの書の執筆依頼を受けておられ、私小曾戸に「こういうものは少しずつ書き溜めるものじゃない。一気に書かないと勢いが出ないよ」と語り、長いこと筆を執られなかったが、いったん書き始めるともの一週間くらいで脱稿されたようである。まえがきに「長友小曾戸洋博士」とあるのは恭男先生ならではの優しい配慮である。

『東洋医学の世界』（北里研究所東洋医学総合研究所、1998、上製A5判、830頁）。恭男先生が北里東医研の所長を退任されるにあたり企画された先生のかつての論文の集成。その学問の広さと深さを示して余りある。私に謝辞が述べられているが、実は最も尽力したのは先生の娘婿の渡辺賢治

先生である。非売品であるが、残部が若干あるので、本学会会員には頒布の便宜をお計りしたいと思います。

5. 大塚恭男先生年譜⁷⁾

昭和5年(1930)

1月29日 高知県香美郡日章村田村に出生

昭和6年(1931)

5月 上京(牛込区船河原町6)

昭和17年(1942)

3月 東京府立津久戸国民学校卒業

4月 東京府立第一中学校入学

昭和22年(1947)

3月 東京府立第一中学校卒業

4月 旧制武蔵高等学校入学

昭和23年(1948)

3月 旧制武蔵高等学校一年終了時中退

4月 旧制第一高等学校入学

昭和24年(1949)

3月 旧制第一高等学校一年修了(学制改革による)

4月 新制東京大学教養部編入, 武蔵大学入学

昭和26年(1951)

4月 東京大学医学部医学科入学

昭和30年(1955)

3月 東京大学医学部医学科卒業

昭和31年(1956)

3月 医学実地修練(インターン)修了

4月 東京大学付属病院第一内科(田坂内科)勤務(～33年3月)

10月 日立製作所病院へ派遣

昭和33年(1958)

4月 東京大学大学院医学博士課程(薬理学)入学

昭和35年(1960)

11月23日 泰子夫人と結婚

昭和37年(1962)

3月 東京大学大学院医学博士課程(薬理学)卒業, 医学博士号取得

9月 旧西ドイツ・オーストリア両国留学(～41年3月)

カール・トーマ社薬理研究所入所(～40年8月)

昭和40年(1965)

9月 ウィーン大学医学部薬理学教室入室(～41年3月)

昭和41年(1966)

4月 東京大学医学部薬理学教室勤務(～42年2月)

昭和42年(1967)

4月 修琴堂大塚医院副院長(～51年3月)
横浜市立大学非常勤講師(薬理学)
(～51年3月)

昭和43年(1968)

4月 日本東洋医学会理事(～45年4月)

昭和47年(1972)

4月 北里研究所東洋医学総合研究所入所(非常勤)

〈著書〉『医学史の旅《パリ》』E・ザイドラー著
／訳著(医歯薬出版)

昭和48年(1973)

3月 独協医科大学非常勤講師(医史学)

4月 日本漢方医学研究所理事

〈著書〉『東洋医学をさぐる』編著(日本評論社)

昭和49年(1974)

4月 北里研究所附属東洋医学総合研究所客員部長(～51年3月)

昭和51年(1976)

4月 北里研究所部長(～55年3月)

北里研究所東洋医学総合研究所基礎研究部長(～52年6月)

昭和大学薬学部兼任講師(和漢生薬学)
(～平成7年3月)

信州大学医学部講師(～52年3月)

5月 北里研究所東洋医学総合研究所研究部長

10月 日本医史学会常任理事

谷口財団主催「東西比較医学史シンポジウム」年1回開催開始, 運営委員

〈著書〉“Asian Medical Systems: A Comparative Study”共著(カリフォルニア大学出版局)

昭和52年(1977)

7月 北里研究所東洋医学総合研究所臨床研究部長(～59年3月)

昭和53年(1978)

6月 厚生省中央薬事審議会臨時委員・一般用医薬品再評価調査会委員(～平成5年10月)

4月 財団野間科学医学研究資料館運営委員(～15年3月)

昭和54年(1979)

5月 厚生省特定疾患スモン調査研究班発足, 班員(～昭和56年度)

〈著書〉『知の革命史 第6巻 医学思想と人間』共著(朝倉書店)

昭和55年(1980)

4月 北里研究所社員

9月 厚生省中央薬事審議会臨時委員・漢方生薬製剤調査会委員(～平成5年10月)

昭和56年(1981)

4月 北里大学客員教授

10月 北里研究所附属東洋医学総合研究所基礎研究部長(兼務)(～57年9月)

野間医学科学研究資料館常務理事

昭和57年(1982)

4月 北里研究所東洋医学総合研究所副所長(～61年7月)

日本東洋医学会副会長(～59年4月)

6月 北里学園評議員(～平成3年6月)

〈著書〉『和漢薬物学』共著(南山堂)

昭和58年(1983)

4月 北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究室室長(兼務)(～60年9月)

〈著書〉『東洋医学入門』(日本評論社)

昭和59年(1984)

5月 北里研究所理事(～平成8年6月)

10月 富山医科薬科大学大学院薬学研究科講師(～60年7月)

11月 日本学術会議医学教育・医史学研究連絡委員会委員(60年7月)

〈著書〉『漢方の基礎と応用』共著(薬事新報社)

昭和60年(1985)

1月 医道顕彰会副会長

9月 日中医学協会評議員

10月 富山医科薬科大学医学部講師(～平成5年3月)

〈著書〉『今日のアジア伝統医学』共編著(Excerpta Medica)

『感染症の漢方治療』編著(メディカルトリビューン)

『臨床医学と薬用植物—世界の薬草と漢方』共訳著(エンタプライズ)

『現代の漢方治療概説・症例・文献リスト』共著(東洋学術出版社)

昭和61年(1986)

4月 北里研究所東洋医学総合研究所診療部長(兼務)(～61年12月)

同所漢方診療部長(兼務)(～平成元年3月)

8月 北里研究所東洋医学総合研究所所長(～平成8年6月)

〈著書〉『繁用漢方薬』共著(日本臨床)

『プライマリ・ケアと東洋医学』共編著(誠信書房)

昭和62年(1987)

4月 日本医史学会総会で会頭講演「隋唐の医学にみる精神病とその治療」

5月 日本東洋医学会会長(～平成元年5月)

〈著書〉『老いの発見3老いの思想』共著(岩波書店)

『臨床薬物治療学大系20 和漢医薬学』共編著(情報開発研究所)

昭和63年(1988)

4月 筑波大学講師(～平成元年3月)

9月 日本学術会議精神医学研究連絡委員会委員(～平成3年8月)

〈著書〉『東洋医学大事典』共編著(講談社)

平成元年(1989)

5月 日本東洋医学会副会長(～3年5月)

7月 チェコ科学アカデミープルキンエー賞受賞

10月 東京生薬協会表彰

〈著書〉『最新の漢方薬理』共編著(Excerpta Medica)

- 『日本科学史の射程』共著(培風館)
- 平成2年(1990)
- 4月 東亜医学協会理事長(～15年)
- 5月 厚生省長寿科学総合研究事業東洋医学分野分野長(～5年5月)
- 〈著書〉『東洋医学入門』共著(読売新聞社)
- 平成3年(1991)
- 4月 東京都衛生局東洋医学検討委員会委員
- 9月 日本学術会議医薬研究連絡委員会委員(～6年8月)
- 〈著書〉『新・漢方処方マニュアル』共編著(思文閣出版)
- 平成4年(1992)
- 8月 第9回和漢医薬学会大会会長
- 〈著書〉『内科診療と漢方』共編著(医薬ジャーナル社)
- 『中国本草図録』共監修(中央公論社)
- 平成5年(1993)
- 5月 厚生省長寿科学総合研究事業研究企画委員会委員(～8年5月)
- 6月 北里研究所副所長(兼任)(～8年6月)
- 〈著書〉『東西生薬考』(創元社)
- 『これだけは知っておきたい漢方治療』編著(日本放送出版協会)
- 平成6年(1994)
- 4月 和漢医薬学会理事(～10年3月)
- 8月 第4回国際アジア伝統医学大会会頭講演「古代アジア医学の伝統」
- 〈著書〉『漢方と薬のはなし』(思文閣出版)
- 『近代中国の伝統医学』共訳著(創元社)
- 『健康生活医学事典』共訳著(創元社)
- 平成7年(1995)
- 4月 新潟大学医学部講師(～8年3月)
- 6月 日本東洋医学会理事(～10年5月)
- 〈著書〉『医学史こぼれ話』(臨床情報センター)
- 『漢方医学の新知識』共著・共監修(日本評論社)

- 平成8年(1996)
- 6月 北里研究所東洋医学総合研究所名誉所長
- 7月 修琴堂大塚医院開業
- 〈著書〉『新書 東洋医学』(岩波書店)
- 平成10年(1998)
- 〈著書〉『東洋医学の世界』(北里研究所東洋医学総合研究所)
- 平成11年(1999)
- 5月 日本東洋医学会名誉会員
- 平成15年(2003)
- 2月 東亜医学協会会長
- 平成19年(2007)
- 4月 東亜医学協会名誉会長
- 平成21年(2009)
- 3月8日 永眠 享年79

文献および注

- 1) 『漢方の臨床』56巻6号(2009), 1077～1082頁。
- 2) 『大塚恭男先生顕彰記念文集』(大塚恭男先生顕彰会, 2010.3)は, 前述の大塚恭男先生顕彰会におけるスピーチ, その他の追悼文, さらに恭男先生生前の旧文を収録し, この日を期して刊行し, 当日参加者に配布された。
- 3) これはかつてベーリング(第1回ノーベル賞受賞者)から北島多一(北里研究所第2代所長)へ, そして北里善次郎から恭男先生に贈られたもの。下述の恭男先生の著書『漢方と薬のはなし』の231頁参照。
- 4) 『私の履歴書・文化人19』(日本経済新聞社, 1984), 393～471頁(大塚敬節)に詳しい。本項の記載は, 「修琴堂大塚家の系譜」(『みどり』4巻4号, 1989.10)によった。同記事は恭男先生の校閲のもと筆者が執筆したものである。
- 5) 大塚恭男『東洋医学』(岩波新書, 1996)のあとがき。
- 6) 前掲注2)の147～148頁に再録してある。
- 7) 本年譜は前掲文献2)収録の大塚恭男先生略歴に若干加筆したものである。

3. 大塚恭男先生の思い出

岡田 靖雄

青柿舎(精神科医療史資料室)

1.

大塚恭男先生は昨年3月8日になくなった。

天候変化のはげしいなか, 日本医史学会3月特別例会として「大塚恭男先生をしのぶ会」がひらかれた3月27日は, 雲がはれて気温は普通であった。桜の咲き始めで, 花はまるで今日の会にそなえられたかのようであった。会場のカンファレンスルームがびっしりになる65名が参加された。まず, 酒井シヅ理事長の発声で大塚先生に黙祷した。

微笑の遺影を前にしての報告の最初は, 原桃介先生(大塚先生の1年後輩, 東京大学物療内科のち同愛記念病院内科医長をながくつとめられた)の「戦後の日本漢方医学界の展望」で, 日本東洋医学会および東亜医学協会を中心に漢方医学界の動きを整理されて, そのなかでの大塚先生の位置をしめされた。ついで小曾戸洋先生(東京薬科大学卒業, 日本大学医学部をへて現在北里大学東洋医学総合研究所部長)が「大塚恭男先生の人と仕事」と題し, その家系および著書を中心に報告された。

2.

「大塚恭男先生の思い出」の部は, 大塚先生にとってのほぼ年代順に予定の6名がはなされた。

日高六郎先生(府立一中および東京大学医学部で同級, 田坂内科入局, 河北病院につとめていた)——府立一中入学は「大東亜」戦争開戦の翌年(1942年)で, まともな授業があったのは1年のときだけ。大塚君がかいた「A先生」は優秀で文集にのった。東京初空襲があり1機が校舎の真上をとんでいった。2年生になると学徒動員で, 御

台場の海軍の材木置き場で材木かつぎ, ついで, 教室の机の上で4角の筒をつくり, コンニャク糊で底をはった。それを有楽座にはこんでいって, 筒に爆薬をつめて風船につけた(風船爆弾)。大塚君とは3年生のとき同クラス。3年2学期から軍需工場にでて航空機の部品づくり, 日の丸鉢巻きで。大塚君はフライス盤をあつかっていた。しかし1945年春になると材料なく, 工場にいてもやることがない。裏で大塚君と将棋をさしていた。艦載機の機銃掃射もうけた。そして4年の8月15日に敗戦。

学制改革があって別の道をあゆんでいたが, 医学部で一緒になり, 卒業しての田坂内科も一緒だった。外勤は大塚君は中川真也君と日立病院で, 僕は近くの日立多賀病院, よくあつてのんでいた。

大澤仲昭先生(医学部4年間を同グループですごし, 沖中内科にはいり, 第3内科助教授をへて大阪医科大学教授をつとめた)——名簿アイウエオ順で大澤, 大塚とつづくので, 医学部4年間一緒に行動した。しかも下宿が下高井戸, 大塚君は当時父上と西荻窪にすんでいたもので, よく遊びにいったご馳走になっていた。食糧難の時代で, なんともありがたかった。あるとき父上敬節先生がでてきて, “漢方を勉強する気はないか”ときかれ, 大塚君とともに『傷寒論』の講義をうけることになった。漢方にも西洋医学にも長短のあることを敬節先生におしえられた。インターンのとき, 内田英一君, 岡庭武君と同級生4人があつまって, 漢方の雑誌にのった症例をカードにかきぬき, それを西洋医学の立ち場から検討した〔そのO委員会カードの大塚恭男作製のものの写しを配布〕。これは今でいうdata baseであり, EBMの

先駆ともいえる。

第3内科助教授となったとき、1985年ごろ漢方外来をはじめることにして、まず自分が西洋医学的にみた症例を大塚恭男先生および松田邦夫先生に漢方の面から診断していただき、自分が漢方処方。再来時にまた両方がそれぞれに評価するやり方をとった。このときは佐藤弘さんにもくわってもらった。あちこちの大学病院などの皮膚科で何年間もどうにもならなかった手掌角化症の症例は温経湯で数か月でよくなった。30年まえにNHKで漢方薬の再評価について対談したその記録がここにあるが、音声がいまうまくだせない。当時の大塚君はクリクリしていた。2006年に僕が第37回日本東洋医学会学術総会の会頭をした。このときの会頭講演は大塚君との対談にしたかったが、かなわなかったのは残念である。

岡田靖雄(精神科医、松沢病院などに勤務)——ぼくらが東京大学医学部に進学したのは1951年(昭和26年)4月。アイウエオ順に8人ずつのグループで実習などにはいるので、ぼくらはCグループ。内田英一さんは美甘内科から心臓血管研究所にすすんだ。大池眞澄さんは厚生省にはって医務局長にもなった。そして、大澤さん、大塚さん。大森皓次さんもはじめ田坂内科で、国立がんセンターにつとめたが、はやく自動車事故死。ぼく、岡庭弘さんも田坂内科で、のち東京日立病院。それから岡本重幸さんははじめ物療内科で、あとは三島で開業している。

大塚さんにはじめてあったときは、アメリカ・インディアンにいておもった。顔があかぐろくて前髪がたっている。いま同級生にきくと小川鼎三先生の講義はわかりにくかったという人もおおいが、ぼくらにとっては印象的だった。“麻田剛立はですな”という艶があってしぶい声はいまも耳にのこっている。大塚さんもその講義に魅せられて“小川鼎庵先生”とともによんでいた。かれが医学史にひきよせられた最初であったか。学生時代の様子はとくにまじめでもサボリでもなくて、適当に出席していた。大池さんが一番休みがおおかったか。

ぼくは日本医史学会にはわりあい早く入会し

ていたが、会合にでることはなかった。1974年(昭和49年)1月の例会は慶應の北里図書館でひらかれ、そのとき大塚さんが「脚氣病院とその後」を報告した。それからは総会にもでるようになったが、懇親会ではのちのちまでもあう人ごとに“岡田君はぼくの同級だったんだよ”と紹介してくれた。1982年(昭和57年)3月に呉秀三先生没後50年記念会がおこなわれたが、かれは委員として準備にあたってくれ、また中心となるシンポジウム「呉秀三先生のこしたもの」では一緒に司会にあたってくれた。

小川理事長が病気のあいだ大塚さんは理事長代行もつとめ、いずれは日本医史学会の理事長というのが衆目の一致するところだった。そのときは、かってでても常務理事になってかれをたすけようとおもっていたのに、ずいぶんはやく役職をしりぞいてしまった。歴史をまなぶものは、自分がいきってきた歴史についてもかたならなくなりたい。大塚さんとも時間をとって、お互いの歴史をかたりあいたかった。大塚さん、あんたははやくいきすぎたんだよな。

酒井シヅ先生(三重大学医学部卒、東京大学脳研究室〔当時小川先生はもういなかった〕で脳解剖学を研究したのち、順天堂大学の医史学研究室にはいった。日本医史学会理事長)——1967年(昭和42年)からのつきあいで、心の友だった。医史学研究室にはいっていくと、大塚先生がさきすすわっていて、小川先生から紹介された。当時の日本医史学会はなんともあわれな低調な状態で、会費もあつまらず、小川先生のポケットマネーとわれわれ二人の人力とで運営されていた。雑誌ができあがると、二人でリヤカーにのせて本郷郵便局まではこんだ。スタンプをおすのに、反対の右肩において、全部おしなおしたこともある。

谷口医史学シンポジウムは、小川先生の友人である帝人の元社長谷口豊三郎氏による谷口財団の事業としてひらかれたものである。大塚先生とは10数年間一緒にこの運営にあたった。海外・国内から数名ずつの参加者をえて1週間泊まり込みでおこなうもので、夜がたのしい。夜は大塚先生の部屋でのんだ。その夜の印象は今ものこってい

る。そのほかにもたのしかったことがおおい。オランダ、中国もご一緒した。

大塚先生はおおまじめだが、ちょっとぬけていた。ある会合でなかなかこられない。別の部屋にはいって、“どうもした顔がない”ともどってこられた。挨拶はいつも直立不動でされた。

大塚先生には東洋医学のことをいろいろおしえていただいた。“あとは酒の上のことで、それは酒の上で”。

高瀬清先生(東京薬科大学名誉教授、日本薬史学会理事)「大塚恭男先生とのご縁」——お会いする機会はおおくなく、定年後には時間がとれるかとおもっていたのに、こうなった。

1) 先輩の長沢元夫氏が山岸晃先生によるR. F. ヴァイス『植物療法』(八坂書房、1995)の翻訳に協力していて、訳文の校閲を大塚先生にお願いしたところ、一語一語原文とてらしあわせて意見をかいてくれた。人をほめない長沢さんが“大塚さんはこういう人だ”とほめていた。

2) イスクラ産業は1960年創業時、ポリオ流行に際しソ連からの生ワクチン輸入をひきうけて全国に配布し、ほとんど1年でポリオ流行を鎮静させた。このイスクラ産業が記念事業団を創設して1974年から、医薬の3人(医学東西から2名、薬学領域1名)に漢方研究イスクラ奨励賞を贈呈することになった。その選考委員として2001年まで大塚先生とご一緒した。大塚先生の推薦はレベルがたかくて、わかなくても賞にあずかっている家を推薦し、視野がひろかった。あとで酒のなかで話をうかがいたかったが、充分にはきけなかった。

3) 沼田岳二氏は妻の父方の伯父にあたる人で、日本の免疫学の草分けの一人で、ワイル氏病の補体結合反応を研究した。北里の学長だった。95歳まで存命したが、なくなる2年前に挨拶にいったところ、東洋医学のことを諄々とといていた。1997年2月、横浜・妙蓮寺の葬儀に参列したところ、隣りに大塚先生がすすわっておられてびっくり! もっと歴史を勉強しておくべきだったと、大塚先生におしえられたようにおもう。

花輪壽彦先生(浜松医科大学卒業、1982年か

ら北里研究所東洋医学総合研究所に勤務し、1991年から大塚所長をついで同研究所所長)——『大塚恭男先生顕彰記念文集』をよんで、こんな立派な先生につけた喜びに感無量であった。誠実でしかもユーモアのある先生だった。外来がいそがしくて午後までになるので、“お疲れでしょう”ともうしあげたら、“患者をみていれば煙草はすわぬし酒ものまぬし、頭はつかう、こんなに健康によいことはないよ”とのお答えだった。飄々と名言をはかれる方だった。

わたしはある有名な基礎医学者の主治医となった。左の脳梗塞、東大病院でリハビリをうけていたが、教授のメニューをいやがり、“じゃ、でていってください”といわれる始末。結局、どこでも院長と喧嘩して、ほかのどこの有名病院でもみはなされた。大塚先生とは武蔵一東大関係で交友があり、ひょこっと北里にきて、“みてくれよ”——“いいですよ”、“入院しようかな”——“いいですよ”ということで、“花輪君よろしく”となったのが9月。大塚先生とはウマがあい、診察も素直にうけていた。東大教授は胸をみず血圧もはかられないのに、“大塚さんはちゃんとみしてくれる”。血圧はいつも120/70。点滴をナースがすると“けしからん”と電話してくるので、それからはわたしが点滴、採血。“いたい”というので、一番ほそい小児用針でやったら“君、採血うまいねえ”と。電話番号おしえておいたら、“胸ちょっと変なんだよ”と夜中に電話。近くにすんでいたのかけつけた。自分の病室には1日最低3回は顔だせとの要求。

ヘヴィスモーカーで肺がんだったが、当時肺がんとはいえなかった。“どうしましょうか”と大塚先生に相談したら、“むずかしい感染症ということにしましょう、基礎の人は臨床をしらないから”。真菌症と説明した。“写真の影がおおきくなるのはどうしましょう。断層写真のフィルムをすこしづらしてとったのをみせていいでしょうか”と相談したら、“それはだめ”といったのちに大塚先生は、“でもすべての責任は僕がとります”といわれたので、ずらした写真をならべて“ちょっといさくなっています”と説明した。

その方が文化勲章をうけられるときは、“元気にしてくれ”というので大塚先生に相談したら、漢方でなくてステロイドのパルス療法の指示。ねたきりだった方が、しゃんとして皇居へいつてきた。だんだんわるくなってきて、“ちょっともよくなれないじゃないか”。大塚先生は直立不動で“食物がないときに煙草をすいすぎたからよくなれないのです”，ご本人おこらず。“じゃ血圧はかりましょう，120/70，いいですよ”。

この方は12月25日になくなった。大塚先生は、えらい人だけど、わがまま，という人の扱いも実に上手だった。本当の病状をしていた奥様には、わたしもたいへん感謝された。

3.

これで予定されていた“思い出”はおわり，あと参会者から二人のお話をいただいた。

大島智夫先生（横浜市立医科大学名誉教授，寄生虫学）——娘が声楽の勉強にウィーンに留学するとき，娘の面倒をみてくださる方の紹介を大塚さんをお願いしたところ，ゴゴラックさん（ハンガリーからきた薬理学者，女性）を紹介された。大塚さんはドイツ語の達人で，人間関係もふかかった。ゴゴラックさんは，大塚さんが紹介してくれた人なら大丈夫と，たいへんよく世話された。また，ウィーンの医史学の名所の回り方をこまかくかいてくださったのは，ありがたかった。

岡庭弘先生——僕も大澤君と一緒に，敬節先生から『傷寒論』をならった。□〔不明字〕となっていてるところにこういう字がはいると，3人で論じた。よく一緒に旅行したが，大塚君は漢詩をよんでいることがおおかた。

最後にご遺族を代表して渡辺賢次様（第2女紀子様夫，慶應大学医学部漢方内科）がたたれた。医学部へはいるとき，漢方をやりたいと北里へたずねてから，北里にいらしてもらえるまで17年かかった。寡黙で会話がはずまぬ人だが，酒をのむとはずむ。外面，内面とかかわらず，どこか超然としている。部屋は本だらけで，その2階がくぼんでいた。休日は本か散歩，ようと漢詩をかく。中勘助の『銀の匙』をいつもよんでいた。日本人よ

りはインド人にちかいか，考え方が100年先，200年先，世俗を超越していた。コートと背広と一緒にぬいだことがあったのか，あるとき背広を2枚きていた。おしゃれに縁のない人。

退職してからドイツへいった。ドイツがすきでアメリカがきらい。アメリカの学会にいやいやながらいった。そこでの挨拶をわたしが準備したが，それをみないで立派に挨拶した。フランス語もやり，ロシア語もやった。頭の中ははんばでないが，それをひけらかすことはなかった。ヨーロッパに心の泉があるといっていた。アメリカには文化がないが，ヨーロッパにはある。ドイツのものはなんでもよい，万年筆も車も。

大塚先生は義父で師匠だった。臨床家としても家庭人としても尊敬できる人。交友範囲ひろく，今日もこんなにあつまっていた。葬式には患者さんが大勢こられたことにおどろいた。

つづいて参会のご遺族の方がたがたって挨拶された，——奥様泰子様，姉の山田美須壽様およびその夫山田光胤先生（本学会評議員）ほか6名。

また会場には独協医科大学寺野彰学長の挨拶がよせられていた。その一部分を紹介すると，“大塚先生のご業績はとても多く，特に東洋医学会及び日本医史学会へのご貢献が非常に大きかったと存じます。先生は，日本医史学会の常任理事として東洋医学史の研究を牽引され，またアジアと欧米の若手研究者の交流と育成にも努められました。／先生は常に柔和であり，かつリーダーとしての風格がありました。今も先生のありし日のにこやかな笑顔が目につかなくてまいります。”

4.

特別例会がおわってから関係者の懇談がなされた。そこででた挿話をいくつか。

まず奥様の話から——元気なときから道をおぼえられず，また人の顔もおぼえられない人だった。追加して小曾戸先生から——一度研究所そばの高速道路にあがってしまい，“高速道路をあるいている人がいる”との電話があった。

姉山田美須壽様から——弟は小学校1年にはいつて〔1月29日生まれで早あがり〕すぐは，しゃ

べらず，うたわず，手をあげず，休み時間は校庭の木をだいてないている，という子だった。“あなたの弟さんないているよ”といわれていた。ところが試験はよくできる。そこで受け持ちが“わかったことには手をあげなさい，さされたらこたえなさい”と指導し，それを約束させた。それからよく手をあげるようになった。全校の朝礼であるとき校長が“カンボウってなにかしている人”といったら，かれ一人手をあげた。校長は“1年生でも官報をしっているのに”と6年生をしかった。弟が家にかえってこの話をしたが，かれ

の“カンボウ”はもちろん“漢方”であった。

なお美須壽様の歌に“泣き虫の弟案じ教室の外より日毎母見守りぬ”，“校庭の隅に泣きいる弟に途方にくれし私小学五年生”がある。

特別例会の当日には，大塚恭男先生顕彰会（東洋医学協会事務編集局内）による『大塚恭男先生顕彰記念文集』が配布された。本稿にえらんだ挿話は，同文集所載のものとはできるだけ重複しないようにした。はなしてくださった方がたの趣旨とくいちがう点が生じたら，お詫びしたい。